

ニャロン・ムニャ語甲拉西 [rGyarwagshis] 方言の音声分析

鈴木博之

本稿では、ニャロン・ムニャ語甲拉西 [rGyarwagshis] 方言の音声分析を通して、その音声的特徴と音体系を明らかにする¹。

論文の構成は、ニャロン・ムニャ語の定義に関する部分と音声分析の部分からなる。

1 ニャロン・ムニャ語とは

1.1 ニャロン・ムニャ語の系統と所属

ニャロン・ムニャ語は中国四川省甘孜藏族自治州新龍県で話されるチベット・ビルマ諸語の1つである。本稿で分析対象とする言語は、先行研究で1つの独立した言語として扱われたことはない。本稿でニャロン・ムニャ語と呼ぶ言語について、先行研究の分類では羌語群のギャロン語支に属する言語とされている²が、決定的な名称はまだ与えられていない。これまでに与えられた漢語による言語名には、「爾翼語」「道孚語」「霍爾巴語」「霍爾巴-上寨語」などがある³。これらの名称を用いる根拠は研究者ごとにあり、一方が一方を批判し互いに名称を認め合わない状況にある⁴。しかしその中で見解に揺れが見られないのは、このようにさまざまな名称で呼ばれる言語が1つの言語であるとみなす点である⁵。

まず、先行研究で言及されるこの「言語」の現在確認される分布地域を県ごとに整理してみると、以下のようである⁶。

¹本稿は第17回チベット＝ビルマ言語学研究会（京都大学ユーラシア文化研究センター・羽田記念館、2009年4月18日開催）において「ニャロン・ムニャ（新龍木雅）語概況」として口頭発表した際に配布した資料の1節および2節について大幅に加筆したものである。

²ただし、「羌語群」も「ギャロン語支」も下位区分としてはなお議論の余地があり、確定的であるとはいえず、分布地域の観点から「川西走廊諸語」とまとめるという見方もある。

³これに対する日本語表記、欧文表記も複数ある。池田 (2003:91-94) 参照。

⁴黄布凡 (1991:1-2)、Sun (2000a:165-166) などの議論を参照。

⁵ただし以前の研究においてこの言語に含まれていた一部の言語グループが、黄布凡 (2001) の議論で別言語「ラヴルン（拉塢戎）語」として独立が主張された、という事例もある。筆者はこの考えを受け入れるが、この見解はまだ完全に研究者によって受け入れられているとはいえない。

⁶現在の行政区分による。黄布凡 (2001) が独立させたラヴルン語は含まない。

1. 道孚県：鮮水鎮、格西郷、葛卡郷、麻孜郷、甲斯孔郷、瓦日郷、木茹郷、孔色郷、沙鐘郷
2. 爐霍県：仁達郷、宜木郷、斯木郷
3. 丹巴県：革什扎郷、邊耳郷、丹東郷、聶呷郷、巴旺郷、東谷郷
4. 壤塘県：蒲西郷、宗科郷、石里郷
5. 新龍県：甲拉西郷、博美郷

これらの地域で話される言語を総括して、先に述べたさまざまな名称で呼ばれているのであるが、これらの分布地域は決して連続しているわけではなく、異なる言語⁷によって分布地域が分断され、次の4つの言語島⁸が形成されている。

1. 道孚県（沙鐘郷除く）および爐霍県を包括する地域
2. 丹巴県および道孚県沙鐘郷を包括する地域
3. 壤塘県のみ
4. 新龍県のみ

さて、これら4つの言語島で話される言語が方言関係にあるということは、一種常識的事項としてこれまで言及されていたが、その親疎を明らかにすることに特化した研究は、今のところ存在しない⁹。確かに、これらの地域で話される言語がよく似た際立つ言語学的特徴をもつことは、Sun (2000ab) の検討によって判明している¹⁰。しかしその議論によってただちにこれらの言語変種が方言関係にあることが証明されたとはいえない。

現在の分布地域を見て、これらが異なる言語島を形成している事実は、より重要視されなければならない。なぜならば、この地域の民族移動をめぐる歴史がほとんど判明していないからである。言語か方言かは言語学的基準のみで判断することは

⁷これに該当する言語を列挙すれば、四土ギャロン語、カムチベット語、アムドチベット語、ラヴルン語があげられる。カムチベット語は方言差が大きく、当該地域に分布しているのは二十四村方言群、ムニャ方言群、北路方言群の3つの下位方言である。なお、アムドチベット語はギャロン周縁地域下位方言に属する方言が分布している（cf. Suzuki 2009:17）。

⁸言語孤島とも呼ばれる。道孚県に分布する言語を対象に、言語孤島であるがゆえに受けたさまざまな言語的影響については、根呷翁姆・胡書津 (2008) 参照。

⁹道孚県（沙鐘郷含む）および爐霍県を包括する地域については、楊嘉銘等 (1994:127) や劉勇 等 (2005:220-223) が下位方言区分を提示している。

¹⁰新龍県で話される変種については、これまでに記述されたことのないものであるため、Sun (2000ab) も言及していない。

難しい。話者の言語感覚や民族意識も場合によっては考慮されることがある。筆者の調査によると、ある1つの言語島の母語話者は自身の属する言語島と異なる言語島で話される言語を母語とは異なった言語であるとみなす場合がある¹¹。また、相互通用性に至っては、実際のところ言語島を越えて通じる可能性は相当低い¹²。ゆえに、異なる言語島には異なる言語名を与えるのが、少なくとも言語研究の上で有用であると考ええる。

一方、黄布凡(2001:90)は「名称は主人に従う」という原則を述べている。つまり、自称を言語名にするという考え方である。現段階で判明している限り、以上の4つの言語島を形成する言語のそれぞれの話者は異なる自称を持っている¹³。この原則にしたがって、筆者はそれぞれの言語について、以下のように名称を与える。そして、主要な先行研究がどの言語を扱っているのか注記する。

1. スタウ(道孚/sTau)語¹⁴: 道孚県(沙鐘郷除く)および爐霍県を包括する地域
2. ゲシツァ(革什扎¹⁵/Geshitsa)語¹⁶: 丹巴県および沙鐘郷を包括する地域
3. ポシ(蒲西/Puxi)語¹⁷: 壤塘県のみ
4. ニャロン・ムニャ(新龍木雅/Nyagrong-Minyag)語¹⁸: 新龍県のみ

ただし、以上のうち、ポシ語は地名に基づいた名称であり、ニャロン・ムニャ語は「地名+自称」の構成をとっている。本稿で議論する後者について、ニャロン・ムニャ語話者の自称は'mə ŋa¹⁹であるが、原則どおりこれを言語名にした場合、これまでに研究されているムニャ語²⁰と衝突するため、地域名である「新龍」のチベット語名 *nyag rong* を冠して差別化をはかることにした²¹。

¹¹ただし筆者の調査していない壤塘県の事例は除く。

¹²丹巴県では、郷ごとでさえ言語の音声特徴、語彙、形態論的特徴に関する変異が大きい。

¹³ただし筆者の調査していない壤塘県の事例は不明である。

¹⁴黄布凡(1991)、黄布凡主編(1992)、劉勇 等(2005:220-223)、根甲翁姆(2008)などが扱う。

¹⁵多爾吉(1998)は「格什扎」を用いているが、現在の行政上の表記は「革什扎」となっている。

¹⁶孫宏開主編(1991)、多爾吉(1998)、孫宏開(2007)などが扱う。

¹⁷Sun (2000ab, 2005, 2007) などが扱う。

¹⁸未記述である。

¹⁹母語話者の意見では、この語は現在の康定西部を中心とする地域および同地の人々をさすチベット名 *mi nyag* と同じであるとのことである。ただしニャロン・ムニャ語話者が自称として'mə ŋaを用いる場合、単に当該母語話者集団を指し、新龍県の特定の地域を指すことはない。また、新龍県のカムチベット語話者は自らを「ムニャ」とは呼ばない。

²⁰この言語もまた羌語群/川西走廊諸語に分類される。

²¹「ニャロン・ムニャ」という名称について母語話者に尋ねたところ、言語名称として用いることに反対意見は出なかった。なお、この言語を「ムニャ」と呼ぶものとしては、《新龍県誌》(1992:370)がある。

以上の説明をもって、ニャロン・ムニャ語が先行研究で言及されるどの言語の変種であるかが定義された。

1.2 ニャロン・ムニャ語の言語概況

ニャロン・ムニャ語は、上述の定義により新龍県でのみ話される言語を指す。

その分布地域として、黄布凡(1991:1; 2003:178)は蔓菁郷、朱倭郷、多占郷を、《新龍県誌》(1992:370)は蔓菁郷、博美郷、尤拉西郷吾日多則村を、楊嘉銘等(1994:127)は蔓菁郷、博美郷をあげているが、博美郷を除いては現在の地図には記載されていない。《新龍県誌》(1992:43-44)の記述と現状を比較すれば、蔓菁郷は甲拉西郷と合併し、朱倭郷は博美郷に改名したと推定できる²²。

筆者の調査協力者は甲拉西[rGya-rwa-gshis]郷黒日[Shod-ring]村²³の出身だが、同郷でニャロン・ムニャ語を用いるのは3つの村のみ²⁴であり、それ以外ではカムチベット語 Nyagrong (新龍)方言²⁵が話されている。黒日村ではほぼすべての住民(チベット族)がニャロン・ムニャ語話者で、年齢にかかわらず会話能力を身につけている一方、そのすべてがカムチベット語 Nyagrong 方言話者²⁶であり、日常生活でも2言語併用が行われている²⁷。このような状況から、ニャロン・ムニャ語とカムチベット語の分布域が境界を形成することはなく、前者は後者の使用域とほぼ完全に重なっていることになる²⁸。

ニャロン・ムニャ語の総話者数は1000人程度と見込まれる²⁹。黒日村を中心とする

²²Karmay & Nagano (2003:446)の地図を参照すれば、蔓菁郷の本来のチベット名は Manchad となっている。同様に、博美郷は Bang-smad である。同書(p.431)にある地名 sGre-bo-this-smad 村の初頭2音節は「朱倭」と対応するように見える。

²³黒日村は旧蔓菁郷郷政府所在地であった(《新龍県誌》1992:43)。調査協力者もまた黒日村がかつて蔓菁と呼ばれていたことを知っている。

²⁴これらはみな旧蔓菁郷に属していたと見られる。

²⁵北路方言群の dKandze (甘孜) 下位方言群に属する。Derge (徳格) 方言と近い特徴をもつと見られるが、詳細な調査はまだ行っていない。

なお、方言名の表記はチベット文語つづりに基づく。

²⁶ニャロン・ムニャ語話者の感覚では、カムチベット語 Nyagrong 方言もまた母語であり、自然に習得した言語であるという。

²⁷基本的に黒日村内ではニャロン・ムニャ語が使用されるが、村外にカムチベット語のみを母語とする人を親戚にもつ人が多く、そのような人々との会話はカムチベット語が使用される。

また、旧蔓菁郷にあるボン教寺院 Mi-nub 寺(僧のほとんどは旧蔓菁郷出身)における言語使用を観察したところ、チベット語で書かれている宗教経典を扱うときにチベット語が用いられる以外、普段の会話は基本的にニャロン・ムニャ語が用いられている。

²⁸学校教育を受けていると四川漢語も理解できるが、少なくとも村において使用する機会に限られており、また一方たとえば新龍県城に出かけたときでもチベット語を用いて交流するのが常で、漢語の使用域はきわめて少ないといえる。

²⁹《新龍県誌》(1992:370)はニャロン・ムニャ語の話者数として「約2732人」を提供しているが、多めに見積もられていると考えられる。

旧蔓青郷地域において簡単な聞き取り調査を行ったところ、現在幼児のいる家庭では幼児に対しニャロン・ムニャ語で話しかけるのではなく、カムチベット語 Nyagrong 方言で積極的に話しかけるという母親が増えている³⁰。この状況が進行すれば、近い将来確実に旧蔓青郷地域でニャロン・ムニャ語が失われることが予測される。

ニャロン・ムニャ語の方言差異は現段階では未調査であるが、黒日村の母語話者によると、旧蔓青郷に含まれる村における方言差異は小さく完全に相互理解できる一方、博美郷のニャロン・ムニャ語は発音の異なりが顕著に見られ、その発音によって容易に出身地が推定できる程度であるが、意思疎通に大きな障害は生じないという。本稿では、次節以降主として扱う方言を rGyarwagshis (甲拉西) 方言と呼ぶ。

ニャロン・ムニャ語とスタウ語などとの相互理解度は低いようである。協力者によると、爐霍県斯木郷のスタウ語³¹は聞き取れて理解できるが、発音が異なるという。スタウ語 Mazur (麻孜) 方言は一部の語彙は分かっても文としては理解が難しく、理解度は斯木郷のスタウ語よりはるかに下がる³²。黄布凡 (1991) の記述するスタウ語 Gebshi (格西) 方言は、同論文を調査票として用いた際にそこの記述にそって筆者が発音してみせたが、Mazur 方言と同程度の理解度と判断された。ゲシツア語は全く分からないという判断であった³³。一方、逆にスタウ語話者にニャロン・ムニャ語を聞いてもらったところ、それがチベット語ではなくスタウ語と近い言語であることは容易に認識でき、語彙のいくつかは理解できるが文の意味を理解することは難しいといい、ゲシツア語話者にニャロン・ムニャ語を聞いてもらったところ、語彙の形式において近いものがあるものの、理解できる言語ではないという判断であった。

以上のことを整理すると、各言語の母語話者の判断する理解度は双方向ともにほぼ一致するという結果が得られたことになる。このような観察だけでは、言語の通用性を妨げる原因を特定することはできないが、語彙も文法もある程度相互に異なっているということは理解できる。

³⁰ 諸般の事情で、この背景にどのような要因が関わっているのかについて十分な調査ができなかった。今後の課題である。

³¹ 劉勇 等 (2005:221) では、筆者のいうスタウ語の孔色方言群に数えられている。斯木郷のスタウ語話者によると、道孚県のスタウ語は発話速度が早くて聞き取りにくいらしい。

³² 筆者による発音に基づく判断である。

³³ 協力者に丹巴県聶呷郷の brGyargyud (甲居) 方言を聞いてもらった判断である。

2 rGyarwagshis 方言の音声分析

音声分析は、超分節音、母音、子音に分けて行う。分析の際には、スタウ語、ゲシツァ語、ポシ語の先行研究で指摘される特徴にも注意を向け、必要に応じて補足的な注記も行う。

調査協力者はヨンゾン [gYang-'dzoms] さん（女性、1990 年生、新龍県甲拉西郷黒日村出身）で、調査は 2008 年 10 月と 2009 年 3 月に康定県城で行い、2009 年 8 月に新龍県甲拉西郷で行った。

2.1 超分節音

2.1.1 声調

超分節音素としては、高低ピッチの差異に基づく「声調」が認められる³⁴。ピッチ以外に付随する分節音の声門化、きしみ音化、息漏れといった音声学的特徴は認められない。

単音節語、2 音節語には高平 (ˉ)、上昇 (ˊ)、下降 (ˋ)、上昇下降 (ˊˋ) の 4 種があるようだ。ただし 4 種すべてが最小対を形成するわけではない。最小対には、次のようなものがある³⁵。

ˉŋo 「顔」	ˋkʰə 「スープ」	ˋre 「1」
ˊŋo 「病気だ」	ˋkʰə 「犬」	ˊre 「布」

調値は必ずしも一定でない。高平ならば、[⁵⁵] でも [⁴⁴] でも実現されるといった具合である。声調を担う単位は語であるといえるが、複音節語では先頭 2 音節しか明瞭な声調の型が現れない。

次に、句を形成した場合の声調の現れについてであるが、名詞句の場合、各語の声調のタイプは維持されることが多い³⁶。たとえば、以下のようである。

「ぶた」: ˋva³⁷ 「白い」: ˋtʰu ˋtʰu

³⁴ スタウ語、ゲシツァ語ともに、複数の声調パターンが認められるが語義弁別機能のない「習慣調」として記述しない先行研究が多いが、それらはすべて再考される必要がある。

³⁵ 以下の例のうち、「1」と「布」の対は Sun (2000b:216) に記述されるポシ語と全く同じ声調パターンになる。具体的には、[re⁵³]「1」: [re¹³]「布」である。

³⁶ スタウ語 Mazur 方言、Phyagru (鮮水) 方言では変化することがしばしば観察される。

³⁷ 声調の現れについて、「ぶた」は ˋva でも ˋva でもなく ˋva として実現する。ˋva はスタウ語 Mazur 方言音、ˋva はスタウ語 Morim (木茹) 方言音である。このように、特定の単音節語の声調については、ピッチの揺れが許容されにくい。鈴木 (2006a) でスタウ語や四土ギャロン語について指摘したような、ピッチの差異で各村間の発音上の差異を見出すという母語話者の言語感覚は、ニャロン・ムニャ語話者にもあてはまる。

「白ぶた」: 'va p^hu p^hu

「雲」: ^hdu mə

「ぶた 1 頭」: 'va 'fia b^hda

「白い雲」: ^hdu mə p^hu p^hu

ただし、複合語になって声調が 1 つになってしまうものもある。たとえば、'va vo p^hu p^hu 「大腸 (白い腸)」 など。このような例は 1 つの語としてとらえるべきであるかもしれない。また、格標識や主題標識なども固有の声調を担わない。

一方、動詞句については、動詞語幹につく接辞は固有の声調を担わず、接辞がつくことで動詞語幹の声調は不安定になる。このため、接辞のついた動詞の声調をいかに扱うかさらに検討する必要があるが、当面現れる声調のパターンに従って表記する。

「私は歩いている」: ^ha (語幹) / ^ha-wə ^hta (語幹-進行の接辞)

「私は行った」: 'tə-^ha-^htsə (方向接辞-語幹-完了の接辞)

「私は行かなかった」: ^tə-ma-^ha (方向接辞-否定辞-語幹)

また、文全体を考えたとき、音韻的ではないイントネーションが少なからず発話に反映され、個々の語の声調は不安定になることがしばしばある。

2.1.2 強勢

現在のところ、声調以外の超分節音的音特徴は明瞭でない。しかし重要な現象に、強勢の存在がある。

通常、強勢は文中で強調したい要素を強く発音し、かつイントネーションも変えるという現象が観察される。ただし、強勢の位置によって文意が変わる場合があり、強勢が落ちる位置を母音の上に ' を付加して表すとなると、以下のような例がある。

'té-γje 「言いなさい」 (方向接辞-語幹)

^te-γjé 「言いましたか」 (方向接辞-語幹)

これは命令文と疑問文の違い³⁸で、ほぼ同一の分節音の列に対して強勢の置かれる位置が異なる。声調の型が異なるが、現段階では本来的な声調パターンと強勢に影響されるイントネーションの相関関係が明らかではない。ただ強勢の位置が聴覚印象として際立っている。このため、強勢の位置を明示する必要があるかも知れない。

³⁸しかしながら、それぞれの文の第 1 要素は異なる形態素といえる。命令文の場合は「命令を表す不特定方向の方向接辞」で、疑問文の場合は「不特定方向の方向接辞と諸否疑問を形成する接頭辞 ?ə の縮約」と分析される。

2.2 母音

調音点による一覧は以下のようなものである。

i		u
e	ə	o
ɛ		ɔ
a		ɑ

2.2.1 口腔内調音と鼻母音

上に示した母音の詳細な口腔内調音の代表的音価は以下のようなになる。

/i/ : [i]	/a/ : [a, ɑ]	/o/ : [o, ɔ, ʊ]
/e/ : [e, ɛ, ɪ]	/ɑ/ : [ɑ]	/u/ : [u]
/ɛ/ : [ɛ]	/ɔ/ : [ɔ]	/ə/ : [ə, ɜ]

以上のうち、/ɑ, ɔ/は例が少なく、主にニャロン・ムニャ語に定着したチベット語来源借用語に見られる。

rGyarwagshis 方言には、鼻母音/非鼻母音の対立が認められる。鼻母音/非鼻母音間で口腔内調音点が特別変化することはない。鼻母音の調音はしばしば安定せず、末子音/ŋ, n/と交替することがある。いずれの末子音が現れるか（もしくは現れないか）は語によって決まるため、語の記述としては末子音が現れるものは明示する必要がある。

以下に具体例を掲げる。

非鼻母音			鼻母音	
i	^h mi	娘	^h ĩ	心臓
e	^h me	目	^h te ^h o r̥tē	白塔
ɛ	^h mɛ rə	凶悪な	^h bo ^w mē	蜜蜂
a	^h ma	兄	^h te ^h ā ra	トイレ
ɑ	^h ma mə	軍人	^h k ^h ā m̥bə	桃
ɔ	^h mɔ ʒa	めんどり	^h tō	煙
o	^h mo	雨	^h lo t ^h ō	口
u	^h rja mru	らくだ	^h ɕ ^h ɔ ɕpə t̥u ze	お供
ə	^h wmə	火	^h q̥ō po	客

2.2.2 母音における「存在しない特徴」

ここでは、rGyarwagshis 方言そのものの記述には必要とされないが、比較的系統が近いと見られる言語の先行研究の記述を参考に、類型的観点から提供すべき「存在しない特徴」についてまとめる。

1. 母音の長短

明瞭には現れない。音声学的特徴の一種で、対立しないのではないかと考えられる。通常は母音は短く発音される。特に強調する場合のイントネーションの変化とともに長母音として発音される傾向にある³⁹。

2. 二重母音

本来語、および定着した借用語には認められない。漢語語彙のニャロン・ムニャ語への直接挿入では、二重母音を伴う漢語音形式（発話者の用いる四川漢語音）がそのまま反映される現象がしばしば確認される⁴⁰。

3. r化母音

未確認である。末子音としての /r/ は存在するが、母音の調音に大きな影響は与えない。/r/ 自体も、/pər, pə/ 「写真」のようにその調音は不安定である⁴¹。

4. 軟口蓋化母音

未確認である⁴²。

³⁹ 黄布凡 (1991) の記述するスタウ語では母音の長短の対立を認めている。スタウ語・ゲシツァ語とも、母音の長短はイントネーションと関連が深いようだ。

⁴⁰ 特に多爾吉 (1998) の記述するゲシツァ語には二重母音が多く認められる。ただし筆者によるゲシツァ語の調査では、それほど多くの二重母音は確認されなかった。単にわたり音に対する音声分析の態度が異なることに起因するだけかもしれない。

⁴¹ 多爾吉 (1998) の記述するゲシツァ語には r 化母音が多く認められる。ただし多爾吉 (1998) が「r 化母音」と呼ぶ要素について、筆者が確認した限りその音声実態は少なくとも 3 種類あり、そり舌化母音 [V̥], 軟口蓋化母音 [Vʲ / V̠], 咽頭化母音 [Vʰ] で、軟口蓋化母音と咽頭化母音は自由変異もしくは方言差異と考えられる。rGyarwagshis 方言ではいずれの特徴を備えた母音もほぼ確認されない。

⁴² 上注で述べたとおり、rGyarwagshis 方言では軟口蓋化母音はほぼ確認されない。ただし口蓋垂音を初頭子音に含む場合、前舌母音は若干軟口蓋化の音色を帯びることがある。

体系的に軟口蓋化/非軟口蓋化母音が確認されるのは Sun (2000b) に報告されるボシ語である。加えて修梧ギャロン語 Zbu 方言 (Sun 2004:272) やラヴルン語の一部の方言 (黄布凡 2007:166) にも見られる。さらに上述のように、ゲシツァ語にも咽頭化母音が見られる。この音声特徴はギャロン語に隣接して分布する言語に共有される地域特徴の可能性はある。

しかしながら中国の言語学論文においては、多爾吉 (1998) の記述にも見られるように、「r 化母音」という用語で軟口蓋化母音もさす可能性がある。その一方で、時には「緊喉母音」と呼ばれたりもするようだ。その点についての詳細は黒澤 (2001) のナシ語の「緊喉母音論争」の議論が参考になる。実際のところ、ムニャ語において「緊喉母音」の呼ばれる要素の音声実現は、大部分が咽頭化母音であることが筆者の調査から判明している。漢語において「緊喉」という用語は 16 種の異なる音声に対して与えられるという報告 (朱曉農 2008:115) もあるため、記述の際には特に注意が必要だろう。

2.3 子音

子音連続の構成要素として現れるものも含めた一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h	k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̥	c	k	q	ʔ
	有声	b	d	d̥	ɟ	g	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h , t ^h	ʃ ^h	ç ^h / ʧ ^h	x ^h	χ ^h	
	無声	f	s, t̥	ʃ	ç / ʧ	x	χ	h
	有声	v	z, ɟ		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ
鼻音	有声	m, ŋ	n		ɲ	ŋ	ɴ	
流音	有声		l	r, ɭ			ʀ	
半母音	有声	w			j			

基本的に、閉鎖・破擦・摩擦音には無声有気・無声無気・有声の3系列が備わっている。その一方で、鼻音・流音・半母音は有声の系列しかない⁴³。

これらの子音はすべて初頭子音（群）を構成する要素になりうるが、末子音になりうる要素は限定される。末子音として現れるものに /v, m, n, ŋ, r, w, j/ が認められるが、/n, ŋ, r/ を除いてきわめて少数の例にのみ現れる⁴⁴。

以下、初頭子音に注目して、単子音と子音連続に分けて述べる⁴⁵。

2.3.1 単子音

いくつかの要素は単子音として確認されない、または極端に確認される例が少ない。これらは子音連続を構成する要素として存在する。

⁴³ 子音体系は /t, ɬ/ や口蓋垂摩擦音系列がそろっている点で、ゲシツァ語よりもスタウ語と似ている。その一方で、摩擦音に有気・無声の2系列がほぼ体系的に備わっている点は、スタウ語よりもゲシツァ語と似ている。

⁴⁴ 末子音 /n, ŋ/ は主に動詞の活用において現れる。末子音 /w, j/ は主に漢語来源借用語に現れる。

⁴⁵ 例語の中で動詞の形態を扱う際、その形態を説明するために以下の略式表示を用い、語義の後ろに () に入れて示す。

ir	 irrealis	2s>3	 2人称単数主語かつ3人称目的語
r	 realis	3>1	 3人称主語かつ1人称目的語
>3	 3人称目的語	3>2	 3人称主語かつ2人称目的語
1s>3	 1人称単数主語かつ3人称目的語		

閉鎖・破擦音

有声音の単子音例は少ない。/d/の例は見つかっていない。

p^h : ʔp ^h ə rə 棒	k : ʔku TENT
p : ʔpo ^h co ほこり	g : ʔgɛ 窓
b : ʔbu rə ʔi てんさい	q^h : ʔq ^h ə 乳牛
t^h : ʔt ^h ə ʔko かまど	q : ʔqō vō 襟
t : ʔtə zə 子山羊	ɣ : ʔla go 木の上
d : ʔdə tsō たまねぎ	ʔ : ʔʔa me 母
t^h : ʔt ^h u ʔt ^h u 引き出し	ts^h : ʔts ^h u ʔpo 商人
t : ʔtə sə ナイフ	ts : ʔdə tsō たまねぎ
d :	dz : ʔdzə ʔke 月(天体)
c^h : ʔc ^h o ʔgo にんにく	tɕ^h : ʔva tɕ ^h e ぶた小屋
c : ʔca lu 吊りベルト	tɕ : ʔtɕi po 帽子
ʃ : ʔje つば	dʒ : ʔdʒa ʔpu 使用人
k^h : ʔk ^h ə 犬	

硬口蓋閉鎖音/c^h, c, ʃ/は、語によってそれぞれ前部硬口蓋破擦音[tɕ^h, tɕ, dʒ]と交替することがある。

/ʔ/は文中において[ɸ]に交替したり⁴⁶、脱落したりする。

発話速度が速い場合、特別な音韻条件もなく無声無気音と有声音が両者とも半有声になって、区別があいまいになる。

摩擦音

単子音としての/ɕ^h, ɕ/は主にチベット語来源借用語に現れる。

f : ʔʃa fu 手袋	ɸ : ʔɸu 丸太
v : ʔvo va 腸	ɕ^h : ʔk ^h a k ^h a ʔɕ ^h e 分離する
s^h : ʔs ^h o tɕ ^h u 場所	ɕ : ʔɕe ɕe 濡れた
s : ʔse ʔke 牛皮の縄	ɕ^h : ʔɕ ^h ə 齒
z : ʔzə 息子	ɕ : ʔɕo ʔpo 羽
ɬ^h : ʔɬ ^h ə ミルク	ɹ : ʔzə 水牛
ɬ : ʔji ʔgi ʔow 学者	ɕ^h : ʔɕ ^h a ʔko 牛肉

⁴⁶ただし記述の際は実際の音声実現にあわせてʔかɸを選択する。

ç : ^çe ma 砂	χ : ^χo tsa 唐辛子
x ^h : ^hge x ^h a ガラス	ʋ : ^ʋe χō ぶたのごはん
x : ʔa xa te どのように	h : ^ha ta 答え
γ : ^na γə 猫	fi : ^fia pte ^h e ちよつと
χ ^h : ^χ ^h o ʔrə fko 理解する (r)	

/h, ɬ/は、まれに両者とも [ʔ] という発音になることがある。
発話速度が速い場合、特別な音韻条件もなく有声音が無声化する場合がある。

共鳴音

/m, n/の例は見つかっていない。

m : ^me 目	l : ^le 木
ɱ :	r : ^ro wo 階下
n : ^no na ti 昔	ɭ : ^ɭo t ^h ō 口
ɳ : ^na γə 猫	ʀ : ^ʀə 頭
ŋ : ^ŋe ʔdza 親戚	w : ^na wu 森
ɲ :	j : ^ji 綿羊

/r/の実際の音価は非常に豊富で、[ɭ, ʀ, ɹ] がよく観察される。[r] では通常発音されない。

/ʀ/はときどき [ʋ] と発音される。ただし/ʋ/と記述される語は [ʀ] を許容しない。
/ɭ/は発音が不安定で、しばしば [ɬ, ɰ] と発音される。

2.3.2 子音連続

最大3子音連続の構成が認められる。大部分は2子音連続で、大きく分けるならば次のようになる。

1. わたり音を含まない子音連続

- (a) ^cC_i 型：初頭の前子音^cは後続の主たる子音 C_i より聞こえの点で弱い
- (b) CC 型：第1要素と第2要素は聞こえが同等か、もしくは第1要素が強い

2. C_iG 型：わたり音 G を含む子音連続

^cC_i 型と CC 型は、語によって両者の発音様式を許容するものがある。その場合は丁寧に発音される場合の形式を記述に採用している。一方でこれらの型のみが異なる最小対はほとんど見出されない。しかしながら、これら発音の型は多くの語で固定され、発音様式相互の異なりは母語話者にとって rGyarwagshis 方言の音声的特徴でないという認識と直結する⁴⁷。

3 子音連続は ^cC_iG / CC_iG の型をとるものが多いが、異なるパターンで現れる例もある。

以上の 1. の子音連続は、最初頭子音の種類に基づいて大まかに以下のように分類できる⁴⁸。

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1. 前鼻音類 | 5. 歯茎音類 | 9. 口蓋垂音類 |
| 2. 唇鼻音類 | 6. そり舌音類 | 10. 前気音類 |
| 3. 唇閉鎖音類 | 7. 硬口蓋音類 | |
| 4. 唇継続音類 | 8. 軟口蓋音類 | |

なお、子音連続の記述には、鼻音、流音、半母音が無声化している場合は無声音であることを明示する⁴⁹。子音連続の表記方法は鈴木 (2005) に従う。

以下、初頭子音について分類して例を掲げる。

1. 前鼻音類（後続調音点に一致）

後続子音に有声性および調音点の面で一致する。基本的に ^cC_i 型であるが、若干例に CC 型が認められる。

^m p ^h : ^h kwa ^m p ^h a 命令	^ŋ t ^h : ^ŋ t ^h i 受け取る
^m p : ^{tə} ^m pe なくす (r)	^ŋ t : ^{ji} ^ŋ tu 見かける (r)
^m b : ^m bə len かな	ⁿ d : ^ŋ də ^r je 防御する

⁴⁷参考として、スタウ語やゲシツア語のある種の方言では、ニャロン・ムニャ語 rGyarwagshis 方言のもつ 2 つの型に加え、C.C 型という 2 子音連続の間に非常に微弱なあいまい母音がはさまれる型もあり、より複雑となっている。

⁴⁸なお、子音連続の組はスタウ語・ゲシツア語と似ている。際立った違いは、歯茎音類を最初頭子音とする子音連続がニャロン・ムニャ語にはほとんど見られないことと、逆に同言語で両唇閉鎖音を最初頭子音とする子音連続が存在することに見られるが、前者の特徴はゲシツア語 brGyargyud 方言と酷似する。

ニャロン・ムニャ語の子音連続の組み合わせは、類型的にはチョコ語 Yonglagshis（尤拉西）方言（王天習 1991）やダバ語 Ngwirdei（紅頂）方言（鈴木 2006b）にも酷似する。

⁴⁹この措置は、子音連続間では有声性が一致することを前提とせず、有声性の不一致が見られる場合に対応するためのものである。有声性の不一致は、第 1 要素を鼻音、流音、半母音の有声音とし、後続子音が無声音もしくは有気音となる場合と、無声の前気音と有声音の後続子音という 2 種の組み合わせがある。現段階では、rGyarwagshis 方言は後者のものを複数許容するが、前者のものは若干例に認められる。

2. 唇鼻音類 ($m/\underset{\cdot}{m}/\eta/\underset{\cdot}{\eta}-$, $m/\underset{\cdot}{m}/\eta-$)

(a) 兩唇鼻音型

⁵⁰ただし両唇ともに唇の内側で調音点を形成するため、唇の動きを観察するとしばしば接触していないように見受けられる。

(b) 唇齒鼻音型

$\text{ṁṇ} : \text{ṁṇi}$ 待つ (2s>3)	$\text{ṁts}^h : \text{ṁts}^hə$ 連れて行く (ir/1s>3)
$\text{ṁc}^h : \text{ṁc}^he$ 履く (r/>3)	$\text{ṁts} : \text{ṁtso}$ 座る (ir/1s>3)
$\text{ṁq}^h : \text{ṁq}^hoŋ$ 必要とする (ir/1s>3)	$\text{ṁṇ} : \text{ṁṇa ṁṇe}$ 12
$\text{ṁq} : \text{ṁqoŋ}$ 必要とする (r/1s>3)	$\text{ṁṇ} : \text{ṁṇa ṁṇe}$ 17

3. 唇閉鎖音類 (p^b -)

後続子音に有声性の面で一致する。有声音の組み合わせは相対的に少ない。基本的に $^c\text{C}_i$ 型である。CC 型は例外的である。

$\text{p}^t^h : \text{ṁt}^hi$ 正しい	$\text{p}^q : \text{ṁwo rə} \text{ṁtə} \text{p}^qe$ 投げる
$\text{p}^t : \text{ṁnə} \text{p}^ti$ 崩壊する	$\text{p}^ts^h : \text{ṁkə} \text{p}^ts^hu$ 服
$\text{p}^t^h : \text{ṁt}^ha \text{ṁpa}$ 肩	$\text{p}^ts : \text{ṁtsu}$ 橋
$\text{p}^t : \text{ṁmə} \text{p}^tō$ 丸薬	$\text{p}^tc^h : \text{ṁfia} \text{p}^tc^he$ 少しの間
$\text{p}^c^h : \text{ṁp}^chi$ (馬に) 乗る (ir)	$\text{p}^tc : \text{ṁp}^tca \text{ka}$ もの
$\text{p}^c : \text{ṁcə} \text{k}^hə$ 倉庫	$\text{b}^d : \text{ṁ}^bdu \text{ṁka}$ 傘
$\text{p}^k^h : \text{ṁk}^ho$ 与える	$\text{b}^j : \text{ṁ}^bjə$ 100
$\text{p}^k : \text{ṁke} \text{p}^ko$ 力	$\text{b}^g : \text{ṁrə} \text{ṁga}$ 眠る
$\text{p}^q^h : \text{ṁp}^q^hə \text{ze}$ 椀	$\text{bz} : \text{ṁkə} \text{bza}$ 貼る

4. 唇継続音類 ($\text{w}^w/\text{f}/\text{v}$ -, $\text{w}/\text{w}/\text{f}/\text{v}$ -)

後続子音に有声性の面で一致する。 $^c\text{C}_i$ 型の種類が多いが、CC 型も認められる。

(a) 両唇接近音型

$\text{w}^d : \text{ṁ}^wda$ 晴れる	$\text{w}^m : \text{ṁ}^wmə$ 鼻/火
$\text{w}^d : \text{ṁ}^wdoŋ \text{ṁ}^fce$ おしゃべりする	$\text{w}^n : \text{ṁ}^wnu \text{mε}$ めす牛
$\text{w}^g : \text{ṁ}^wgo \text{ṁ}^go$ 凸の	$\text{w}^n : \text{ṁ}^wnō \text{ṁ}^mba$ 狂う
$\text{w}^dz : \text{ṁ}^mo \text{ṁ}^dzi$ 夜が明ける	$\text{w}^ŋ : \text{ṁ}^cε \text{ṁ}^ŋa$ 若い
$\text{w}^v : \text{ṁ}^wva$ 黒テント	$\text{w}^l : \text{ṁ}^wle$ 風
$\text{w}^z : \text{ṁ}^wza$ 石	$\text{w}^r : \text{ṁ}^wre \text{ṁ}^vʒə$ 私生児
$\text{w}^ʃ : \text{ṁ}^wʃe$ 舌	$\text{w}^R : \text{ṁ}^tə \text{ṁ}^wRo$ 曲がる
$\text{w}^ʒ : \text{ṁ}^tə \text{ṁ}^hə \text{ṁ}^za$ 鴨	$\text{w}^p : \text{ṁ}^fi \text{ṁ}^yo \text{ṁ}^pu$ 脳
$\text{w}^ʁ : \text{ṁ}^wʁa$ 10	$\text{w}^t : \text{ṁ}^mde \text{ṁ}^vu \text{ṁ}^wta$ 実がなる

wc : ʷcə ねずみ	wɕ : ʷno ʷɕi 霊魂
wk : ʷku 寒い	wj : ʷwɔ 嘔吐する
wq^h : ʷq ^h a 触る (ir)	wz : ʷtɕ ^h ə ʷza 鴨
wq : ʷqa 触る (r)	wp : ʷa ʷpo 単独の
wts : ʷtso vo 老人	wk : ʷtow ʷko ブレスレット
wɕ^h : ʷtɕ ^h e 押さえる	wɕ^h : ʷba ʷtɕ ^h ə 16
wɕ : ʷtɕi 腰	wɕ : ʷtɕe ʷa きつい
ws^h : ʷs ^h e mo 涼しい	ws^h : ʷs ^h u tsə 育つ
ws : ʷpke ʷse 性格	
wɕ^h : ʷcɕ ʷɕ ^h u 裕福な	

(b) 唇歯摩擦音型

ʰt : ʰti və 猿	ʰz : ʰkə ʰzo 学ぶ
ʰc^h : ʰc ^h e 大きい状態である	ʰɕ : ʰvɕə 糞
ʰc : ʰtə ʰci (馬に) 乗る (r/>3)	ʰr : ʰrə 見つける (3>1)
ʰk^h : ʰto ʰk ^h o 与える	ʰt : ʰtoj ʰtɕe ʰten 解散する
ʰk : ʰrə ʰko 分かる (r)	ʰk : ʰfkə 切る (r/>3)
ʰq : ʰa ʰqo 今	ʰtɕ : ʰci dzə ʰtɕə ʰnu 騒ぎ立てる
ʰs^h : ʰs ^h ə ʰs ^h ə ʰvə ピクニックする	ʰs : ʰba ʰsu 13
ʰs : ʰa ʰsə 遠慮深い	ʰt : ʰfla 盛る
ʰt^h : ʰt ^h ə ʰtja 子牛	ʰc^h : ʰcɕ ʰɕ ^h u 太った
ʰt : ʰtɕe 過ぎる	vz : ʰvzə zə 弓
ʰc^h : ʰɕə ʰc ^h i 拭く	vj : ʰme vje 明日
ʰc : ʰfca ʰtsə 打つ (r)	vɕ : ʰba vɕɕ 14
ʰd : ʰkə ʰdə ʰza nə 呪う	vɔ : ʰvɔa rə 守る (ir/2s>3)
ʰg : ʰk ^h a ʰk ^h a ʰgu 縫い目をほどく	vr : ʰba vre 11 ⁵¹
ʰdz : ʰdzi 人	

5. 歯茎音類 (ʰl-, s/z/ʰl-/l-)

この組み合わせは例が少ない。その上、ʰl-, l-類の歯茎流音部分は文中においてそれぞれj-, j-で実現される傾向にあり、硬口蓋半母音として定着しかかっていることから、ʰl-, l-類はほぼ消えかかっている子音連続のパターンといえる。^cC_i

⁵¹ʰba vre/の第2音節の/r/がわたり音と分析されないのは、語源的な理由(「1」はʰre/)とともに、その発音においてわたり音/r/とは異なる音の連続を構成するからである。

型、CC 型ともに認められる。

t : ^htu^hge^hre ko 混乱する

dz : ^hdzonj k^hə 緑の

m : ^hmə 雹

s : ^hsə 月 (年月)

z : ^hkə z^hə 耕す

tt : ^httō t^he^hkə s^he どもる人

ts : ^hgə tso qə 見る

lv : ^hlvə 斧

6. そり舌音類 (^r-, ^s/r/-)

後続子音に有声性の面で一致する。この組み合わせもまた例が少ない。特に^s-はほとんど見られない。^cC_i 型が多いが、CC 型も認められる。

t : ^rtē ko 秋

t : ^rtər tə 初乳

k : ^hch^ha^hko 牛肉

s : ^cce^hsa 硬い

j : ^hndə^hje 防御する

g : ^hsh^he^hgo けちな

dz : ^hkə^hdzə 尋ねる

v : ^rvi バター

h : ^hfio^hha 淹れる

rt : ^hmə^hrti 兄弟

rts : ^hma^hrtsa 資金

rtc : ^hth^hə^hrtcə ヨーグルト

rch : ^hpə^hrch^he 遅い

stc : ^hke^hstc^he 刺さって痛い

rdz : ^hrdzo^htsə 傲慢な

ry : ^hkə^hryi 馬

ry : ^hrya^hmru らくだ

7. 硬口蓋音類 (^vj-, ^cj/-)

後続子音に有声性の面で多く一致するが、少数例で一致しない。^cC_i 型、CC 型ともに認められる。

tc : ^hryi^htcu 鞭

q : ^hne^hqdu 物語

tc : ^hje^htc^hci^hme^htc^hci 必ず

h : ^hj^hh^he 狼

n : ^hj^hne あえてする

l : ^hwbu^hla 小便する

n : ^hj^hne 7

cp : ^hcpo 引越す

th : ^hne^hth^hu 混ぜる

ct : ^hli^hctə 方法

ch : ^hth^hə^hch^ha 切り分ける

ts : ^hke^htsa^hqi 覚えている

tc : ^hth^hə^htc^hco やけどする

cl : ^hwe^hcl^ha 残される

jdz : ^hγ^hə^hjdza 頼る

jh : ^hj^hh^he 読む

jz : ^hkə^hjza 髪をとく

jm : ^hjmi 尾

jn : ^hγ^ha^hjne 昨日

jn : ^hj^hne 耳

8. 軟口蓋音類 ($k/x/\gamma$ -, $k/x/\gamma$ -)

後続子音に有声性の面で一致する。軟口蓋閉鎖音の現れる例は特に少ない。 cC_i 型が多いが、CC型も認められる。

$k^h t^h$: 'nə $k^h t^h i$ びっくりする

$k^h t^h \epsilon^h$: 'bja $k^h t^h \epsilon^h a$ 広々とした

$x^h t^h$: 'qə $x^h t^h i$ しあさって

$x^h t$: 'ʔa $x^h t a \eta$ 集まる

$x^h t^h$: 'x $t^h e$ 蟻

$x^h t$: 'za $x^h t i$ 根

$x^h c^h$: 'x $c^h e$ 収穫する

$x^h q$: 'ke ϵtsa 'xqi 覚えている

$x^h ts^h$: 'ɣu $x^h ts^h u$ 搾る

$x^h t^h \epsilon^h$: 'x $t^h \epsilon^h e$ 6

$x^h t^h \epsilon$: 'x $t^h \epsilon i$ $^h ku$ ~まで

$x^h s^h$: 'x $s^h e$ 新しい

$x^h s$: 'x $s u$ 3

$x^h \epsilon$: 'x $\epsilon \epsilon$ $^h ko$ 春

$\gamma^h \epsilon$: 'γ $\epsilon \epsilon$ 4

$\gamma^h m$: 'wu $\gamma^h mo$ 借りる

$\gamma^h n$: 'γ ne 2

$\gamma^h l$: 'γ la $\gamma^h la$ 幹

ks : 'ksā $^p jər$ 新聞

xt : 'pa $xt \epsilon$ 結婚する

$xt \epsilon$: 'cε $xt \epsilon \epsilon$ 貧しい

xs^h : 'kə $xs^h u$ 秘密にする

xs : 're xse 吊り下げる

xt^h : 'xt $^h ov$ 救う

γz : 'γ zer からい

$\gamma \epsilon$: 'γ $\epsilon \epsilon$ 地

γm : 'fiu γmo 吹く

γl : 'γ $l \epsilon$ 歌

9. 口蓋垂音類 (χ/ψ -, χ/ψ -)

後続子音に有声性の面で一致する。有声音の組み合わせは相対的に少ない。 cC_i 型、CC型ともに認められる。

$\chi^h p$: 'χ $p \epsilon$ 官

$\chi^h q^h$: 'tə $\chi^h q^h o$ 布施

$\chi^h ts^h$: 'χ $ts^h \epsilon$ 土

$\chi^h t^h \epsilon$: 'χ $t^h \epsilon i$ $\chi^h t^h \epsilon i$ ベルト

$\chi^h s$: 'χ se 新鮮な

$\chi^h t^h$: 'χ $t^h \epsilon$ 来る (r)

$\chi^h t$: 'wu $\chi^h t e$ 来る (ir)

$\psi^h \epsilon$: 'ψ ϵi 小麦

$\chi^h p$: 'dza $\chi^h pu$ 使用人

$\chi^h c^h$: 'cε $\chi^h c^h o$ 汚い

$\chi^h k^h$: 'tə $\chi^h k^h \epsilon$ 切断する

$\chi^h k$: 'χ ko 箱

$\chi^h q^h$: 'ni $\chi^h q^h a$ 20

$\chi^h q$: 'me $\chi^h qa$ 目が見えない

$\chi^h ts$: 'χ tsu 冬

$\chi^h t^h \epsilon$: 'χ $t^h \epsilon^h a$ 掻く

$\chi^h t^h \epsilon$: 'na $\chi^h t^h \epsilon a$ 息子の嫁

$\chi^h s^h$: 'qo $\chi^h s^h u$ 支える

$\chi^h s$: 'χ se 金

$\chi^h t^h$: 'tə $\chi^h t^h u$ 壊す

$\psi^h v$: 'lo $\psi^h v \epsilon$ 立つ

$\psi^h \epsilon$: 'tə $\psi^h \epsilon e$ 壊れる

$\psi^h m$: 'dza $\psi^h mu$ 女使用人

10. 前気音類 (^hf_i-)

後続子音に有声性の面で多く一致するが、鼻音を主子音とするものには有声性が一致しないものも認められる。先行する音節が開音節で前舌狭母音であるとき、まれに前気音部が [^hj] になることがある。^cC_i 型のみである。

^h p : ^h pə ɕ ^{hi} 琥珀	^h d : ^h də ra 庭
^h t : ^h tu 虎	^h dʒ : ^h ta ^h dʒi ^h nə 準備する
^h t : ^h ce ^h tu 整理する	^h j : ^h ja ^h c ^{ho} 乱す
^h c : ^h cə mo 炊事員	^h g : ^h gu 家畜
^h k : ^h kə 切る (ir)	^h dz : ^h dzə və 祖先
^h q : ^h qə jpə のど	^h dʒ : ^h dʒi ^h go 耳が聞こえない
^h ts : ^h tsoŋ ma 清潔な	^h v : ^h vu 腹
^h tɕ : ^h tɕo ma ポプラ	^h z : ^h za ^h da wa 月曜日
^h s : ^h so 命	^h ɣ : ^h ɣo ^h pu 脳
^h ɬ : ^h ɬə 竜神	^h ʁ : ^h ʁa 狐
^h ɕ ^h : ^h we ^h ɕ ^{he} 娶る	^h m : ^h ɕtɕə ^h mo 染める
^h ɕ : ^h re ^h ɕe 物乞いする	^h n : ^h no re 午前
^h m : ^h mi 娘	^h ɲ : ^h ɲa rə 守る (ir)
^h n : ^h ne tə 鼻タバコ	^h ŋ : ^h ŋə ひざ
^h ŋ : ^h ŋa 呪文	^h w : ^h wə tɕ ^{ha} 権力
^h b : ^h ɣə ^h ba 知らせる	^h j : ^h ja ^h ka 夏

以上がわたり音を含まない2子音連続である。

次にわたり音を含む例について述べる。わたり音には w/v/j/l/r がある。

^h tɕ ^h w : ^h tɕ ^h wi だから	^h r : ^h ɣrə 水
^h mw : ^h mwo 埋める	^h mr : ^h ɲa mru らくだ
^h rw : ^h tə tɕə rwi 思い出す	^h nr : ^h ku nra 安い
^h ɣv : ^h nu ɕu ^h ɣvo 退く	^h wr : ^h wroŋ 砂糖
^h ɲv : ^h wle ɲvə nə だます	^h ɕj : ^h nə ɕja 咳をする
^h br : ^h ʔa bra 土ねずみ	^h ɕj : ^h ɕje しらみ
^h vr : ^h di ^h vrə ^h ɕ ^{ha} 関心をもつ	^h ɣj : ^h zo ɣju 銅

sl : 'va sla 派遣する

xl : ^χla ya 鹿

γl : ^fi ju 'γla 吸い込む

次に3子音連続の例である。わたり音 G を含むか否かで分けて例をあげる。

わたり音 G を含む例

mb r : ^mbre うらむ

N B V : ^N B V E 5

h k h r : ^h k h r i 呼ばれる

fi l w : ^fi l w a 咳をする

N q h r : ^N q h r i 妹

w k w : 'tə w k w o 風邪をひく

N q r : ^wə N q r e 笑う

N R W : ^tə N R W ə 曲がった

n d r : ^n d r i 米

m B V : ^B a m B V E 15

n d r : ^n d r e 鬼

P t w : ^tse P t w a 'tə w z a 腹を立てる

n j w : ^n ə w a 'tə n j w a 転落する

P t h j : ^P t h j e v u おとどし

f k h w : ^tə f k h w a 掘る

f l j : ^kə f l j o ŋ 稲光が走る

x k w : ^tə x k w a 背負う

r B j : ^r B j e 連れる

h k w : ^h k w a m p h a 命令

fi g w : ^nə fi g w o ありがとう

わたり音 G を含まない例

mb d : ^mb d e うらむ

γ v B : ^re γ v B a レンガで作る

m p t h : ^m p t h i 蛇

f χ c h : ^kə f χ c h e 噛む (ir)

f x t h : ^rə f x t h ə 放す (ir/>3)

f χ c : ^kə f χ c e 噛む (r)

r ʔ t : ^cə r ʔ t ə 甘い

j m g : ^zə j m g e 最も低い

P t h : ^P t h i 飲む (r/ls>3)

w n d : ^w n d a 踏む

v γ z : ^v γ z o ŋ 糞をする

以上にあげたものの以外にも、さらに多くの子音連続の組み合わせがあると考えられる。最も期待されるのは、動詞について形態論的に生産的な接頭辞 ^{f/v/ŋ/ɲ}/f/v/ŋ/ɲ-⁵²で始まる組み合わせ、およびそれを含む3子音連続である。

⁵²この接頭辞の用法は完全に説明できるものであるとはいえない。確認される例を見ると、1・2人称主語かつ3人称目的語を有する場合に現れるという傾向がある。

なお、スタウ語、ゲシツア語、ポシ語のいずれにも、これに類する音形をもつ動詞接頭辞を有するが、^{m/ɲ}-は確認されない。形態論的手続きを考えると、これは前鼻音部と ^{f/v}-が融合して成立している音形であると考えられる。参考になる現象に、ダバ語 Wado (瓦多) 方言のいくつかの前鼻音つき初頭子音をもつ動詞では完了体を形成するとき前鼻音と後続子音の間を割って -p- が挿入されるという事例がある (龔群虎 2007:83)。

2.3.3 子音に関わる注目すべき音声現象

語を単位に見られる現象

特に子音連続について、ある語に含まれる子音連続の中に以下のような現象が見られる。

1. 子音連続における第1要素の調音のゆれ

ˈjʃe / ˈjʃe 「狼」
 ˈpʰtɕʰi / ˈɣtɕʰi 「草」
 ˈmza / ˈwza 「石」
 ˈmbre / ˈmbde 「うらむ」

2. 1音節と2音節の交替

ˈje ˈbə / ˈjbə 「太陽」

このタイプは非常に少数の例に限り確認される。

3. 有声前気音の脱落

ˈvu / ˈvu 「腹」

これは有声音の前気音を伴う例に見られる変異であり、有声音であることに由来する自由変異ではない。

以上に示したペアはどちらかが古い形で現在変化が進行中の状態を表しているかもしれないが、詳細は現段階ではよく分かっていない⁵³。

⁵³ただし「うらむ」の例は、ˈmbreの方がより古い形態であることが周辺言語の事例との対照を通して理解できる。

	ニャロン・ムニャ語	スタウ語	ゲシツア語
語義	rGyarwagshis 方言	Mazur 方言	brGyargyud 方言
白い	ˈpʰu pʰu	ˈpʰru pʰru	ˈpʰru pʰru
蛇	ˈmpʰi	ˈmpʰri	ˈmpʰre?

ニャロン・ムニャ語ではわたり音 r を含む例が相対的に少なく、上に見られるように、系統的に近い言語でわたり音 r を含むものがそり舌音に対応するようになっている。これはチベット語においても文語つづりと多数の方言形式の対応関係に見出される特徴であり、音対応として決して珍しいことではない。

句を単位に見られる現象

単子音の項でも触れたが、/?は句、文中において、開音節で終わる語に後続する場合、音声学的に [ʔ, ɦ] となるかもしくは脱落することがある。場合によっては、先行する開音節で終わる語の母音を脱落させ、/?で始まる音節の母音と縮約し、1音節になることがある。たとえば、以下のようなものである。

p^ha^htoŋ 「～といっしょに」 < p^hɔ 「～と（共格）」 + ʔa^htoŋ 「いっしょに」

このような事例は、特に固定された少数の音節の連続に見られる。

3 音声分析のまとめ

本稿では、ニャロン・ムニャ語 rGyarwagshis 方言の音声分析を行い、以下のような特徴が明らかとなった。

- 超分節音素として4種の声調および強勢による対立がある
- 母音体系において非鼻母音/鼻母音の対立があり、長短の対立、r化母音、軟口蓋化母音は存在しない
- 子音体系において閉鎖音、破擦音、摩擦音はほとんど有気無声、無気無声、有声の対立がある
- 初頭子音連続は3子音を最大とし、かつ2子音連続の組み合わせが豊富に存在する

本稿では系統に近いスタウ語、ゲシツァ語、ポシ語などの言語との対照を簡潔な注記にとどめたが、超分節音、母音、子音のそれぞれにおいて異なりの見られる点を指摘した。また、ニャロン・ムニャ語の子音連続の構成について、これらの言語とともにチョユ語やダパ語などの言語とも共有する特徴が見られる点も指摘した。地域的な観点からも含め、本格的な諸言語間の音体系の対照にも取り組む必要がある。加えて、ニャロン・ムニャ語には形態論、形態音韻論に関わる音特徴も見出され、さらに調査、分析を進めることで本稿の分析を補完する必要性もある。

参考文献

- 池田巧 (2003) 「西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布」 崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』63-114 国立民族学博物館
- 黒澤直道 (2001) 「ナシ（納西）語「緊喉母音論争」の意義—中甸県三壩郷白地方言に見られる音声現象からの考察—」『アジア・アフリカ言語文化研究』第61号 241-250
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第69号 1-23
- (2006a) 「四川省チベット族の言語を表記する」 塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』67-79 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- (2006b) 「ダパ語紅頂 [Ngwirdei] 方言の音声分析と方言特徴」『京都大学言語学研究』第25号 105-129
- Karmay, Samten G. & Yasuhiko Nagano (eds.) (2003) *A Survey of Bonpo Monasteries and Temples in Tibet and the Himalaya*, National Museum of Ethnology
- Sun, Jackson T.-S. (2000a) Parallelisms in the verbal morphology of Sidaba rGyalrong and Lavrung in rGyalrongic, in : *Language and Linguistics* 1.1, 161-190
- (2000b) Stem alternations in Puxi verb inflection: Toward validating the rGyalrongic subgroup in Qiangic, in : *Language and Linguistics* 1.2, 211-232
- (2004) Verb-stem variations in Showu rGyalrong, 林英津他編『漢藏語研究 龔煌城先生七秩壽慶論文集』269-296 中央研究院語言學研究所
- (2005) *Linguistic coding of generic human arguments in rGyalrongic languages*, paper presented at 11th Himalayan Languages Symposium
- (2007) Morphological causative formation in Shangzhai Horpa, in : *Bulletin of Chinese Linguistics* Vol.II No.1, 211-231
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology* (No. 16102001) Report Vol.3, 15-34
- 戴慶廈等 (1991) 《藏緬語十五種》北京燕山出版社
- 多爾吉 [rDo-rje] (1998) 《道孚語格什扎話研究》中国藏學出版社

- 龔群虎 (2007) 《扎巴語研究》民族出版社
- 黃布凡 (1991) 〈道孚語〉戴慶廈等 1-45
- (2001) 〈觀音橋話語屬問題研究〉《語言暨語言學》2.1, 69-92
- (2003) 〈羌語支〉馬學良主編《漢藏語概論》176-307 民族出版社
- (2007) 《拉烏戎語研究》民族出版社
- 黃布凡主編 (1992) 《藏緬語族語言詞匯》中央民族學院出版社
- 根呷翁姆 [Kun-dga' dBang-mo] (2008) 《道孚語-道孚話研究》西南民族大學碩士論文
- 根呷翁姆・胡書津 (2008) 〈多語環境中的道孚“語言孤島”現象分析〉《西南民族大學學報》(人文社科版) 第5期 86-90
- 劉勇 等 (2005) 《鮮水河畔的道孚藏族多元文化》四川民族出版社
- 四川省甘孜藏族自治州新龍縣誌編纂委員會編 (1992) 《新龍縣誌》四川人民出版社
- 孫宏開 (2007) 〈爾翼語〉孫宏開等主編《中國的語言》924-949 商務印書館
- 孫宏開主編 (1991) 《藏緬語語音和詞匯》中國社會科學出版社
- 王天習 (1991) 〈却域語〉戴慶廈等 46-63
- 楊嘉銘等 (1994) 《甘孜藏族自治州民族誌》當代中國出版社
- 朱曉農 (2008) 〈非肺部氣流輔音〉《東方語言學》第三輯 102-116

[付記]

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本學術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本學術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本學術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)

Esquisse d'analyse phonétique du nyagrong-minyag le dialecte de rGyarwagshis [Jialaxi]

Hiroyuki SUZUKI

résumé

Le nyagrong-minyag est une langue tibéto-birmane parlée au centre du district de Xinlong [Nyag-rong], dans la préfecture de Ganzi au Sichuan en Chine. Cet article traite l'analyse phonétique du dialecte de rGyarwagshis du nyagrong-minyag.

Avant de la discussion, l'auteur présente la langue nyagrong-minyag parmi les langues dites «rgyalrongiques», qui est indépendante des langues sTau, Geshitsa et Puxi.

Le dialecte de rGyarwagshis du nyagrong-minyag possède les caractéristiques phonétiques suivantes :

1. Existence d'une distinction suprasegmentale (ton/hauteur et accent).
2. Vocalisme avec les voyelles orale et nasale, sans distinction courte/longue, présences de polyphthongue, de voyelles rhotacisées et vélarisées.
3. Consonantisme avec les séries «sourde aspirée/sourde non-aspirée/sonore» à quasiment tous les lieux d'articulation des occlusives, affriquées et fricatives.
4. Existence d'un bon nombre important de groupes consonantiques, qui peuvent inclure au plus trois éléments.

(受領日 2009年5月28日)
(受理日 2009年9月1日)